

「・ル・ハーテローのヒューネシヤ（一）

「ヒューネシヤのハーテロー」

鳥 越 輝 昭

本文

—・ル・ハーテロー (L. P. Hartley, 1895-1972) は二〇世紀、今の日本では知る人のあつた作家である。知る人も、おもじろくは怪奇物の短編作家として記憶を残してゐるのではないか。

ハーテローの怪奇短編小説は、「ポドロ」が、かつて『山川短編』世界大図書館全集、第三八卷、怪奇小説傑作集（東原創元社、1958、宇野利康訳）の巻頭に収録されて以来、一ダースほどの作品が邦訳された。そのうちの一三五篇が、現在流通している選集にも入っている。それに、今は絶版だが、集英社の『世界短編文学全集』、イギリス文学一、廿四（1962）にも怪奇短編「ミ・ミ」が収録されていた。ハーテローは本邦でも、怪奇的傾向の短編作家として、少しこながら一角を占めていたようだ。

しかし、長編小説作家としてのハーテローは、なかなかたたずまつた。ハーテローは、廿世纪十七弾の長編小説を出版した作家であるのに對して、短編小説は、兎唇のものながら、一弾に満たないだけの数しか書いてい

なに。連続計量的視しや 本領は職場小説であつたと見るべれども。あだ 頭の頭の中 ハーネロー 廉院派」
 一八〇九一八二七 幕府官吏職場「職業の仕事」上場アル・ハコトスな作家としての本領は職場小説 これに切った
 人アービン (Peter Bien, L. P. Hartley, Pennsylvania: Pennsylvania State U. P., 1963) といひて 職場作家
 トのハーネロー 本邦で最もよく知られるなかつた。唯一の例外として 五十冊以上数年前に 代表
 作『職場のふくら The Go-Between』が一説 幕既日堅われただけである (職場小説『恋を聞く女』1955 森田
 重樹著『恋』1971) がふくらの代表作職場『Eustace and Hilda』(『恋』1955) は幕既われなかつた。ハーネ
 ローは職場のいわゆる本邦のそれだけ ごろつどもいたといふべきだ。あだ 職場小説書や いわ
 めど日本では出版されなかつたものもある。『職場』『イギリス小説』(第三版 旗文社1974) や ハーネロー
 が書いたハーネロー トクトクへば居候お家いや おまつまいかつたことばれども。

日本で出版されたこの文部書の記述により、ハーネロー問題がある。もはや職場『英米文学事典』(旗文社 第三版
 1985)『新編中堅文部書』(新編社 増補改訂版 1990)『職場社中堅文部書』(集英社 2002)『イギリス文
 職場』(旗文社 2004) にせ、こゝにハーネロー問題の短い紹介がある。そこには集英社版の記述が、短いながら
 充実したものがいる。ハーネローの書籍の記述によれば その作家はイタコの都合でネシヤトに隠す言及が全
 くなつた。だが、ハーネローは書籍の十数年間、毎年、一年の半分をハーネシヤトで暮らした人である。書籍上
 の処女作『Simoneetta Perkins』(1925) がハーネシヤトを舞踏する女優小説であつた。代表作『Eustace and
 Hilda』(職場の娘)『Eustace and Hilda』(1947) がハーネシヤトを舞踏する女優小説であつた。ハーネローの妹も、兄の死後を懐かしつづけた

マシコトハ・リバートリ「おまえがソーヴィーが挿画ハルハラノサウトの世界だつたまニハドコロ、ナヌル程な
シベニアチハナヘヤアの世界ハサウメ」、アドリアン・ライト (Adrian Wright, *Foreign Country: The Life of L. P. Hartley*, London: André Deutch, 1966, p. 274) シリーズの脚本アーチー・ラムゼイの「世界」は、
上院へ赴いた世界であつた。アーチーは脚本にて「世界」を「世界」である。

ヒュンゼー 横濱の英文外語 富士川英夫『新・横濱文外語』(なかや書店 2003, p. 170) のなかで、現在も英語でも「謎めいたこの世界」(The Go-Between) などと訳されるが、バーティーの英語版の訳本や、エラズモス やモーリーなどのだいだいたが。U.S. 著者の新譯書『Eustace and Hilda』(U.S. The Go-Between) が、Simone Perkin's が翻訳したのが、The Hiring などから「謎めいた世界」(謎横濱) — 串や流傳 — たしかに、バーティーの作品は謎めいた、精神への闇の世界、何かかなたへ、あるいはこいつらだね。

Alexander, *A History of English Literature* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2000) 125-126 <6>
「*ハーネスの娘*」のだが、I J のなかで「I J の〔アヘン〕・ペルヒスの〔エラスティ〕セ「Eustace and Hilda」
The Go-Between の脚本」。ム・バーテニーによる脚本で原作脚本は「*ハーネス*」の脚本家 (p. 351)
ハーネス 妹 | 父母の離婚後、心に傷付いた彼女が、かうして、ハーネスの脚本家ハーネスの夫
「ハーネス」の妻へ恋慕する人脈を構つた。だが、戀心は譲れぬが、英國と米国如きの大手
の出版社で二つや三つ、脚本の脚本作家だった (Edward T. Jones, L. P. Hartley, Boston: Twayne
Publishers, 1978, p. 11)。現在の挿絵圖の状態よりも二つや三つもの脚本が残る。⁶

わざ、拙稿では、二回に分けた、この作家とヴェネツィアとの関連を二様に捉えてみたい。第一回は、この人物の生涯のなかでこの都市が果たした役割。第一回は、この作家が作品のなかでこの都市をどのように描いていたか。第二回は、この作家の文学活動のなかでヴェネツィアがどういった意義を持ったのかについてである。回を追うにつれて、ハートレーが、第一に、単に怪奇的短編の書き手ではなかつたこと、第一に、ヴェネツィアに深く関わつて、そこに重要な題材を探つた作家であること、第二に、ヴェネツィアとの関わり方と題材の取り上げ方の特徴も、おのずと明らかになるであろう。

今回の拙文だけについていえば、これまで邦語によるやや詳しい伝記はなかつたし、ウェネツィアとの関わりについて述べた伝記もなかつたのであるから、それだけからこゝで、拙文に若干の意義はあるだらうと考へてこの

一
略伝

ト・ド・ハーテローの翻訳者トマス・ハーテローの著書『アドリアン・ライト、外國の人生』(Adrian Wright, *Foreign Country: The Life of L. P. Hartley*, London: André Deutsch, 1996)によれば、ハートレーは「外國的」な人生を送ったが故に、この「外國的」人生は「外國的」な私信が残されたのである。外國的私信の多くは、この本に載る「外國的」な人生の物語である。

レズリー・ポウルズ・ハートレー (Leslie Poles Hartley) は、ハーリッセイ (Whittlesey) に生まれ、一九七一年十一月、ロハツヘで死去した。死因は心臓病である。享年七十七歳であった。

レズリの生地ウイトルシーは、ケンブリッジ州の古都ピーターバラからおよそハマイル離れた町である。十九世紀末年（1891）の統計では、ウイトルシーの人口は、周辺の沼沢地や村を併せて六、二四五人であった。この地方は、ロンドン市場向けの小麦、ヒンドウ豆、ジャガイモを産し、また口干し薬草を産する場所であった。

レズリーの父 ハリー・バーク・ハートリー (Harry Bark Hartley) は、事務弁護士であつたが、加えて事業の才があった。ハリーは、一八九八年、地元の煉瓦会社の重役になつたが、その会社は、窯焼きに適した良質の粘土の発見と、折からの煉瓦需要によつて発展した。息子レズリーが、上層中産階級の子弟として生れましたのは、父が煉瓦事業で成功したおかげである。成功のほどは、途田からハートリー一家の住んだ住居に見るといふが、さうである。一九一八年、一家は引っ越しをしたが、越した先は、ピーターバラ市の町外れにある、フレトン・タワー

(Fletton Tower) ハーフの塔である。屋敷は「シック様式の小型の城」といふくな建物で、およそ九エーカーの広い土地がついた。

父ハリー・ハートリーは、宗教的にはメンジスト派のキリスト教を信仰し、政治的には自由党支持者であった。ハリーは読書家で、少年レズリーの本に関する知識が、父との会話から得たものが多くった。ハリーは判断力に絶対の自信を持つてゐるところであった。母ベシー（Bessie）は、それと対照的に、心配性で、神経質で、家族の成功を生き甲斐とする女性であった。ベシーはトーリンシャロンケフローの詩を好んだ。信仰は、ハリーと回り、メンジスト派である。

ハリーとベシーは一八九一年に結婚した。結婚生活は幸福なものであったところ、ふたりのあこだには、翌一八九一年に、長女エニード・メアリー（Enid Mary）が生まれ、九年後、長男レズリー・ポウルズが生まれ、一九二二年に次女アニー・ノーラ（Annie Norah）が生まれて、この、娘舅につかれた如レズリーは、文人レズリー・スティーウィン（小説家ワーナー・カントの父）にむなだものだといつた。スティーウィンは両親の尊敬していた人物だしだが、ふたりに文学趣味があつたことは、この件跡でも知られる。

これらの子供たちの育つた家庭は、ピローリタン的雰囲気に満ちていた。メンジスト派のピローリターブルは、父親ハリーの場合には、「スマートな理性主義」に傾き、母親ベシーの場合には、「他人に正しく進路を進ませるためにせ、自分はいかなる苦痛も忍せねばならない」とこゝの体のものだったそうだ。この家庭では、飲酒は眉をひそめられ、トランプ遊びは許されず、美的感覚にふけるのも喜ばれなかつた。だが、息子のレズリーは、両親のピローリターブルを受け継ぎつつ、それから逃れよといひかる心を抱わせ持つて、こゝに見受けられた。

レズリー・ポワルズ・ハートリーは、丸顔の、ウエーブした髪を持つ、病弱な子供であった。当時、ピーターバラのよつな田舎町は社交的でない場所で、レズリー少年も館のなかに隠じこもりがちに育ち、心配性の母親の関心を専らにしていた。

少年時代のレズリーは、姉H. I. L. H. M. から、家庭教師から教育を受けた。その後、レズリーは、一九一八年、カネット州クコフトンカイル (Cliftonville, Thanet) にあった予備学校の寄宿生となつた。まもなく十三歳になつて、レズリーは勤勉で眞面目な生徒であつたといふ。IJの学校で、中産階級出身のレズリーははじめて上流階級出身の少年たちとも知り合つたのである。IJのところ、レズリーは生徒 上流階級の生活ぶりに魅了され、IJの階級の周辺に生きるようになつた。

一九一一年、レズリーは港町アリストル近郊のクラifton・スクール (Clifton College) に進学したが、胸部疾患の兆候が現れたので退学し、別のパブリック・スクール、ハロウ (Harrow) に進学した。レズリーは、IJの娘門校での生活を楽しんだやうである。ハロウ時代のレズリーは主席となるほどの業績に優れ、ピアノも学校のコンサートで演奏するせびの腕前で、フットボール・チームの主将も務めた。

ハロウ在学中の一九一二年、レズリーは両親の宗教であるメソジスト派を去り、英國国教に改宗してゐる。英國社会のH. W. R. を育てるハロウ校では、メソジスト派の生徒は全校生徒中わずか二十人ほどしかいなかつたが、H. W. R. の改宗について、伝記作者ライトは、宗教的熱意から成されたものではなく、スノビズムの現れであるつていつ（前掲書、p. 38）。半ばはそのとおりである。ただし、レズリーが教会建築や聖歌の美しさに惹かれたのを取り上げて、宗教の本質でない些末な装飾に惹かれたのだとライトがこつのは、英國国教のよつな典礼を重視す

る宗派については正しくないだろ? わたしゃ思ひ。

ハロウ時代のレズリーは、文部趣味も育てた。好んだ作家は、H.H.コー・プロハート、ホーンン、ヘンリー・ジョンソンであった。レズリーは、在学中に「プロハート」については論文を、ホーンンについてはオッセイを書いている。レズリーは、その後、生涯プロハートを愛好し、ホーンンに魅了され続けた。

一九一五年十月、レズリーは、オックスフォード大学、ベイリオル学寮に入学した。その前年には第一次世界大戦が始まっていた。入学の翌年、ハートリーも、あまり気乗りのしないまま、志願して軍隊に入った。しかし、肺と心臓の不調ゆえに、戦場に出でることなく、一九一八年九月に除隊となった。この体験の結果として、國のために働けなかつた悔いと、「はみ出しが」意識などが残つた様子である。

同年十月、ハートリーはオックスフォード大学に復学した。大学で、レズリーは、自分の出身階級よりも上の階級の学友たちと交際する傾向があった。そのひとりが、まもなく評論家として名を成すティヴィイッシュ・セシル（David Cecil, 1902-1986）だ。これはソールズベリー侯爵の子息であった。在学中に、ハートリーは上流社会にも出入りし始めた。親しく交際をつけていたなかに、アスキス家がある。第一次世界大戦勃発の頃、首相を務めていた政治家ハーバート・ヘンリー・アスキスの一家である。

オックスフォード在学中のハートリーには、婚約との解消という事件もあった。一日婚約したものの、ハートリーが逡巡してくるのか、相手の女性が別の男と婚約したのである。ハートリーは、あることは自分が結婚生活に不適かもしけないと悩んだのであつたのか、ハートリーは「JのJの神経症」苦しんだ様子である。

やせつタクスフォール在学中の一九二一年、ハートリーせせしむハネシヤを訪れた。このか、ハートリーザのトドコト海の町をへつかへし訪ねる所が、ハートリーとハネシヤとの懇わうじゆこは、次節でややくわかへ扱つので、じねが初訪問であるたゞいふらねに止む。

翌一九三三年、ハートリーは、オックスフォーム大学の近代史専攻を「次席優等」で卒業した。ハートリーは「優等」でなかつたじゆ、がつかつて、過小評価されたじ感つたもひどね。かなむに、イーガン・ウォー（Evelyn Waugh, 1903-66）の『ハイバード・ブリッジ revisited』（1945）には、ハートリーが在勤してゐたと壁壁回時期のオックスフォール大学の様子が描かれている。この小説のなかでは、オックスフォームの最上級生である登場人物が、入学したての語り手に向かへ、「君は歴史を専攻してゐるのだね。たゞへん起つ科だ。こなはて駄目なのが英文だ、つまじ駄目なのが哲学・政治学・経済学だ。しかし、優等を取るのだから、その中間の成績には価値がない」とこつてこぬのが思て丑れね。ハートリーは、良好的な専攻を、無価値な成績で卒業つたわけである。

ハートリーは、オックスフォーム大学在学中に文筆活動を開始したのだが、その側面については、後段でまことに扱つうじよつて、この人物の生涯で、いくつか気になる点ふれておきた。

ひとえに、ハートリーは心臓とともに健康でなかつたといふことは、中等学校時代のハートリーがワシントボールの選手として活躍したのは例外的なことだ。幼少時期のハートリーは呼吸器疾患があり、成人してからのハートリーは心臓が不調で、中年以降は高血圧症に苦しんだ。死の床についたのも、心臓発作が原因であった。また中

年以後のハートリーは極度に肥満し、「洋梨型」の体躯と称されるよつになる。肥満の主たる原因は、過度の飲酒と運動不足であった。晩年のハートリーは、朝から一日中飲酒（特にジン）をする状態になつていた。一九七一年『スペクテイター』誌の短編小説「コンテスト」の審査をしたときのハートリーは、毎前から大量の酒を飲み続け、同席した文芸部記者の回想によれば、「大きな赤い顎をして、よだれを垂らした。下唇からよだれを垂らすのを自分で止める」ことができなかつた」そつである。アルコール依存症であったのだろつ。

ハートリーは、精神的にも不安定などといふある人であつたりし。すでに婚約解消事件に関連して、神経症を経験したことにふれたが、ハートリーはのちに六十歳の頃にも神経症に悩み、精神分析医の治療を受けることを考へ、友人に止められたこと。おそらくは深酒もまた、不安定な精神状態を麻痺させようとしたもので、かえりでそれを悪化させる原因となつたのではなかつただろつ。

自分自身が同性愛者であるじい伝記作者ライアは、ハートリーは同性愛者であったと断定してゐる。ライアの断定は、血の嗅覚に基づくものであるから、眞実を突いてゐるのかも知れない。晩年のハートリー自身もやうじうの性癖を他人にはのめかしたこともありしこ。こずれにしても、ハートリーは終生独身であつた。

ハートリーが同性愛者であったとすればなおのことであるし、仮にそれでなかつたとしても、独身生活を送つたといつただけで、ハートリーの精神にはひとつも葛藤が生じたにちがいなし。それといつのも、書き物から判断するなり、ハートリーはあきらかに保守的な考え方を持ち主であつたし、ピューリタン的な思想や倫理観を（国教会への改宗後も）捨てきれなかつたよつて感じられるからである。ハートリーは、本来なり、通常の家庭生活を離れて、独身生活や同性愛を絶対する側に立つたかったはずである。といふが、望ましくて、自分を少数派で、はみ出し者

の位置に置かれたを得なくなつた。皮肉なしである。ハートリーが、生まれ育つた英國に違和感を感じていたことは、おやいへやの性癖や生活形態に深く関わっていたであら。しかしあたゞ、いひこの中の葛藤や違和感が小説家ハートリーを生み出したところの側面も忘れてはなるま。

ハートリーは大学卒業後、壮年時代は、一年の半分をウェネツィアに住まつほかは、両親の家フレイン・タワーや、友人の家に転々と滞在した。そして遅ればせに四十年代半ばから、自分の家に住まつようになつたのである。ハートリーは四十四歳のときにソールズベリー市内の、川沿いの家を借り、つこでトイヴィッシュ・セシル夫妻の留守宅に仮住まいをした後、五十二歳の時から、バース市に近い村バースフォードに邸宅を購入して移り、晩年にはロンドン市内にフリッシュも所有した。バースフォードの家は、ハイヴォン川に沿い庭付きの、のちにはホテルに改装されるほどの規模の邸宅であった。ハートリーはそこに使用人たれど住まつたのである。しかし、ハートリーと交遊のあつた評論家ウォルター・アレン（Walter Allen, 1911-95）は、この家はあまり生活感がなく、ハートリーの孤独さが印象的であった。と回響して云ふ。家は構えてこても、ハートリーは、妻子がこなつたために家庭がなく、英國の社会への所属も希薄であり、そのことは鋭敏なハートリー自身が自覚していたであら。

ハートリーは、上流階級の生活形態にあいがれ、その階級の人たちとの交際を求めた。交際は多くの場合、話されたよつだが、それは上流階級の一員になつたところじとでなく、ハートリーはその周辺に留まつた。これは上流階級の長所も短所も見えやすい視角を得たところじとである。だがまた、ハートリーは、上流階級との生活形態じが確固としていた時期の英國に残着し、社会改革と福祉国家化が進んで、（ハートリーの原方では）下層階級の墮落が進行してゐるを嫌惡した。やがて、じだいに英国社会への違和感を募らせてこつたよつである。

家族との関係について見ると、ハートリーは、実業家であった父親の期待に反して、文学とこの虚業の世界に入つたことについては、自身の狭さを感じ続けていたらしい。父親は文学を生業にするのを容認してくれたようだが、それにもかかわらず、ハートリーの一種の罪悪感は持続したようである。しかも、その父親は強健で、一九五四年、九十四歳まで生き、最晩年まで煉瓦会社の経営に従事していた。ハートリー自身は父親が死去した年、すでに六十歳間近であった。また、のちに見るとおり、ハートリーが文筆で自立できたのはひじょうに遅く、五十歳頃のことである。それまでは実質的に父親の資産に寄生していたのであるから、自身の狭さはなおさらであったわけ。

母親は、すでにふれたように、家族のことを過剰に心配し、家族の成功を望む女性で、子供に対しては過保護に傾いた。ハートリーが結婚をして、子供を作つて、一家を形成しなかつたこともおそらく原因となり、母親は、いつもでもハートリーと同居したがつた。それをハートリーはあつがたく思いつつ、疎ましく感じ続けた様子である。しかも、母親もわりあい長寿で、ハートリーが五十歳近くなるまで存命であった。

長姉は自我と指導欲の強い女性であつたらしく、自我が弱くて、他人の意思を尊重しがちなハートリーには、半ば必要でありながら、敬遠したくなる存在であつたらしく、「」の姉がハートリー同様に独身であつたために、独身の弟ハートリーにその強力な意志が向かう傾きがあつた。この姉は、終生、父母の家に同居し、一九六七年、ハートリーの最晩年まで生きていた。ハートリーには、「」の父・母・姉と、彼らの住む家フレトン・タワーから離れよう、できるだけ近寄るまい、とする行動が見られる。

ハートリーの交友関係では、すでにふれたように、上流階級の人たちとの交遊が目立つ。男の友人たちのなかで、とりわけ重要な意味を持つたのが評論家として名高いディヴィッド・セシルである。セシルはハートリーよりもや

や年少で、大革命時代に出でて、親友となりた人物である。小説作家ハイアードの推測によれば、ハートリーのセシルに対する感情は同性愛である。したがって、セシルが婚約したのは、ハートリーにとって裏切り行為と感じられた。ハートリーセシルを生涯許すことができなかつたのだ。そのため（前掲書 pp. 98-100）。ただし、わたしがは眞偽の判定はできかねぬ。しかし、ハートリーセシルの結婚式では付添を務め、二人の間にできた子供の代父もつとめた。セシル夫妻の蜜月を借りてこられた。小説家ハートリーと、この処女作 *Simonetta Perkins* (1925) はセシルに獻呈されたし、ハートリーは終生、自分の書きやの筆を持つをセシルに判断つてもらひのが常であった。一方、小説家としてのハートリーの美点を主に論じたのもセシルであった。

ハートリーは女性の友人も多かつたが、とりわけ重要なのが、七十歳間近く知り合つたジーン・ホール (Joan Hall) である。ジーンは文学好きの主婦で、知性に優れ、読書家で、ゴーモアのセシスがあつ、よい友人となつたが、それはかりでなく、作家としてのハートリーに重要な役目を果たした。ハートリーはタイプができないなつたが、ジーンはタイプが上手であった。しかも、おもなく、ジーンはハートリーの洋書役に選ばれたが、草稿の判読をゆだねられ、わざとさせ、最終原稿に纏め上げる役割もゆだねられたようになら。つまり、ジーンはハートリー作品の一種の校訂者になつたのである。なお、ジーンのハートリーへの気持ちは友情を超えるものであつたりしが、ハートリーセシルほど踏み出せなかつたようだ。

ハートリーセシル作品のなかで、くつかえふ年期のイラクマを描いた。作品に描かれる少年の心に深い傷を負わせた事件そのものが作品によって異なるし、あまり説得力がなきよしに感じられた場合もある。しかし、ハート

リーがトラウマ体験を取り上げる執拗さを見れば、伝記作者ハイムのよひに、ハートリー自身のトラウマ体験があつたと推測したくなつて当然である（前掲書 p. 253; pp. 213-14）。ハイムハイムのこのひみつは、ハートリーが同性愛者であつたとすれば、そのじいじを自覚した、あるいは自覺せられたことからハートリーアルマとなりたのであらうか。

ハートリーは、自分ではラジオのスイッチを入れることもできない人であつたといふ。そして配偶者もいなかつた。したがつて、生活していくための助けは、すべて使用人から得るしかなかつた。ところが、ハートリーは使用人を雇い入れる場面で、信用のおける紹介業者を介さず、『タイムズ』誌に求人広告を載せ、みずから面接をして採用した。このよひにして最初に雇つた使用人頭は頼れる人物であつたものの、使用人のあいだではトラブルが絶えなかつた。しかも、ハートリーはのちには精神異常者や犯罪者を雇つて、被害を被る』ともあつたのである。ただし、ハートリーは、みずから、使用人に尋常でない人間たちを求めていた様子も窺える。それに、ウォルター・アレンの回憶によれば、ハートリーはいかにも「カモ」のように見えてしまつてゐる人で、使用人たちからだけでなくほかにもさまざまな人たちの犠牲になつたのだそつである。

ハートリーの文筆活動はいつのこつものだつたか。ハートリーの文筆活動の開始は早く、オックスフォード大学在学中からであつた。『オックスフォード・アウトルック』誌の副編集長として編集に当たるかたわら、書評や短編小説をこの雑誌に掲載したのである。この雑誌に発表した短編数編はまもなく初短編集『夜の怪Night Fears』（1924）として録されねりといつた。

大学卒業後、ハートリーが長年携わつた文筆活動は書評の執筆であつた。『スペクティマー』、『スケッチ』、『サ

タトー・レガーナー』、『ウェイクハハナ・レガーナー』、『オブガーバー』といった新聞雑誌上、新刊小説の書評を書いたのである。一九一九年、『スケッチ』誌に書評を書き始めたのは、『高貴な文芸批評家』で、「現在の英國で小説については最高の批評家」と紹介されるようになつてこた。「せじる」で述べた Michael Alexander の英文学史が、書評家としてハートリーを取り上げていたのは、じつは、それなりの根柢があつたわけでもない。ハートリーは、一十数年間にわたり、およそ六十冊を超える本を書評しただけのと回憶している。毎週平均五冊を書評したのだといつである。伝記作者フライは、小説家ヒュー・ウォルポール（Hugh Walpole, 1884-1941）がハートリーに宛てた言葉、「わたくしの知るかぎり、聰明で、親切でやさしい唯一の批評家」などと書きながら、ハートリーが判断と理解にすぐれた書評家であったと述べてゐる。おもいかへば、六十冊ほどの数の執筆依頼があつたこと自体が、一般的には、ハートリーの綴った書評の高さを証明しているに違はない。しかしその一方で、ハートリーの小説を高く評価し、友人ともなつたウォルター・アレンが、「いつなるかに、自分の出版した」二三の小説をハートリーによつて、「あまり同情心も洞察力も見られない」と書こうとしたときにも注意して良いだといふ。一週間に五冊も書評すれば、質問ばかりつきが生じて当然だからである。ハートリーがこれまで多數の書評を長年書き続けた背景には、依頼を断れない性格のほかに、文筆に従事していく由尊心を満足させる気持ちもあつたようである。また、書評をする」とから学べる点も少なくなかつたであらうが、他方には弊害もあつて、ハートリーはのちには本を読む喜びを失い、創作に欠かせない想像力の減退も招いたようである。

創作家としてのハートリーが世間で評価されたのは、文芸批評家として知られたときよりはるかに後の、第一次世界大戦が終つた頃からである。ハートリーは、すくなく四十九歳になつてこた。そのときまだ二十一歳、ハートリー

「これより先、一九四五五年に、ハートリーは出版社パトナム社から、一九四七年未までに、右の二部作に續いてもう一冊小説を書くなら、月々六ポンドの前渡し金を受け取る」との約束を得ていた。ハートリーは、このときから「小説家としての生活」に入ったと見て良いだろ。

プロトコルナルな小説家としてのハーティーの『Eustace and Hilda』などは、たゞそれだけ、ハーティーを有名小説家にしたのが、一九三四年の『The Go-Between』だった。この小説は、少年時代から上流の

令嬢との使用人とのあいだで、恋の取つ控ひ役をつひるやうにされ、心に傷を負つた人物の思ふ出版である。「ハイシド・セシル」は、『タイムズ文部付録』誌上に載つた小説を「完成度の極めて高い作品で、ねいこを正確に達成してこらへながら、此の説明を要しない。読んで贊美すればよこだけである」と絶賛した。出版社（ハーリントン社）側では、初年度の売り上げを十万部と見込んでいたのが、五万部に達しなかつたのでがつかりしたところだが、それにしてよく売れたことに驚異はない。この作品はハイネマン文庫賞を受賞つたし、出版後まもなく、仏語、伊語、蘭語、ノルウホー語、フィンランド語に訳された。一九五五年に日本語訳（鷹澤忠枝訳）も出版されたのだが、「まえがき」で述べたとおりである。一九五五年に、ハートリーが王立文学協会の特別企画に選ばれたり、翌一九五六年に大英帝国第三等勲爵士を授けられたのだが、この作品によって有名作家となつたのが機縁である。この「ハートリー」は、英國国内ばかりではなく、ドイツやイタリヤで公演旅行をしたり、ソビエトやトルコで講演をしたつかぬ所である。一九六二年には、国際ペンクラブ英國本部の会員に選ばれる。文筆界の四十になつたのである。

「わなみ」、「The Go-Between」出版直初から映画化の話があつたが、なかなか実現せず、実際に映画化されたのは一九七一年になつてからである。脚本はハロルド・ピンター（Harold Pinter, 1909-84）の脚本で、ジョセフ・ロゼイ（Joseph Losey, 1909-84）監督によつて、ハーフォーク州でロケーション撮影された。ハートリーは妹ノーリーの手稿「『わなみ』」を起じた脚本ではなくのだが、イースト・トライアベットの近くで撮られたところになつた「わなみ」が書かれた。小説中の出来事がなにかの事実に基いてつづられたことを窺わせる脚本である。撮影はハートリーが心の動揺を見せたところ。映画の出来は上々だったが、収録は上からなかつたといつもある。

スル ハーネーの誕生日 | 読む壁上に 壁紙の色褪せたてで 次回・次々回の壁紙にいたるまでの
 もう少し早い わたおと お風呂場『最新ハサコバタウチ』(新星社・研究書刊行会 1995)
 ハ L. P. Hartley の書『ハーネー』は 王室の半数程越しかねて これまでの壁紙がおなじ
 なります。

Night Fears and Other Stories (Putnam, 1924) 蝶蝶集

Simonetta Perkins (Putnam, 1925) 女優伝記

The Killing Bottle (Putnam, 1932) 蝶蝶集

The Shrimp and the Anemone (Putnam, 1944) 蝶蝶伝記

The Sixth Heaven (Putnam, 1946) 蝶蝶伝記

Eustace and Hilda (Putnam, 1947) 蝶蝶伝記

The Boat (Putnam, 1949) 蝶蝶伝記

The Travelling Grave (Barrie, 1951) 蝶蝶伝記

My Fellow Devils (Barrie, 1951) 蝶蝶伝記

The Go-Between (Hamish Hamilton, 1953) 蝶蝶伝記

The White Wand and Other Stories (Hamish Hamilton, 1954) 蝶蝶集 (蝶蝶伝記と女優伝記)

A Perfect Woman (Hamish Hamilton, 1955) 蝶蝶伝記

The Hiring (Hamish Hamilton, 1957) 岩波文庫

Facial Justice (Hamish Hamilton, 1960) 岩波文庫

Two for the River (Hamish Hamilton, 1961) 岩波文庫

The Brickfield (Hamish Hamilton, 1964) 岩波文庫

The Betrayal (Hamish Hamilton, 1966) 岩波文庫

The Novelist's Responsibility: Lectures and Essays (Hamish Hamilton, 1967) 岩波文庫

The Collected Short Stories of L. P. Hartley (Hamish Hamilton, 1968) 岩波文庫

Poor Clare (Hamish Hamilton, 1968) 岩波文庫

The Love-Adept (Hamish Hamilton, 1969) 岩波文庫

My Sister's Keeper (Hamish Hamilton, 1970) 岩波文庫

The Harness Room (Hamish Hamilton, 1971) 岩波文庫

Mrs Carteret Receives and Other Stories (Hamish Hamilton, 1971) 岩波文庫 (岩波文庫文庫)

The Collections (Hamish Hamilton, 1972) 岩波文庫

The Will and the Way (Hamish Hamilton, 1973) 岩波文庫

The Complete Short Stories of L. P. Hartley (Hamish Hamilton, 1973) 岩波文庫

— フランシスのハーティー —

「フランシスは近代のアーロン・ローリーの人間で、現代日本人にいっては、時代と似た意味を持つた都合であった」。十九世紀後半のアーロン・ローリーが、時代と似た意味を持つた都合であった。十九世紀後半のアーロン・ローリーが、時代と似た意味を持つた都合であった。十九世紀後半のアーロン・ローリーが、時代と似た意味を持つた都合であった。十九世紀後半のアーロン・ローリーが、時代と似た意味を持つた都合であった。

十九世紀後半のアーロン・ローリーは、上流階級や上層中産階級の人たちに似て、生産と販賣から手を離れたのである。ハーティー・ジム（Henry James, 1843-1916）、マルセル・プロスト（Marcel Proust, 1871-1922）、マーティン・マン（Thomas Mann, 1875-1955）、フレデリック・ロルフ（Frederick Rolfe, 1860-1913）も、上流階級から手を離れたのである。十九世紀後半のアーロン・ローリーは、時代と似た意味を持つた都合であった。十九世紀後半のアーロン・ローリーは、時代と似た意味を持つた都合であった。

Brown, 1853-1926) も、時代と似た意味を持つた都合であった。ハーティー・ジム（Henry James, 1843-1916）は、時代と似た意味を持つた都合であった。十九世紀後半のアーロン・ローリーは、時代と似た意味を持つた都合であった。十九世紀後半のアーロン・ローリーは、時代と似た意味を持つた都合であった。

ハーネーがせじぬいカーネシニアを訪れたのは、一九二〇年九月、一十七歳の少年である。ハーネーはまだオックスフォード在学中であった。友人クリフチャーチ・キチン（Clifford Kitchin, 1895-1967. の小説家）から旅を誘われ、あまり乗つ気ではなかったが、従つたところ。しかゞせじぬい体験かわゆるカーネシニアは、予想に反して快い場所であった。ハーネーは現地かいぬきに宛てた手紙で、以下の書こうと云う。

「ジエラード心地の悪くないんだ……。 ジエラード岬、田が墜つ浜ごどこで、並くせ、田畠田んじい、鹽田かな浜辺で、水浴をしまつた。 こゝとこの場所だよ。 …… ジエラードもや骨折つゝ也無縫の場所です。 ハーネーは『旅』を積み上げてくれたが、やれと乗つて、ジエラードへのかくはのせ、船間さかかぬむれび、丸太を滑つて登つねるのに迷つた。

神経症に悩んでいたハーネーは、「旅」を積み上げた。「『旅』を積み上げた」と、ジエラード、あつがたこゆのやうに違いない。しかも、「ジエラード心地の悪くない」、ここは認識はまだ、ハーネーがJの町の重要な本質を認座につかみ取つたところである。やがて、トロント人のカーネシニア通JIIHが、初訪問のJの町かい感ひ取つたやう、思ひたへ回つたのである。JIIHはのちに『遊覧集』アルター・カーネシニア暮らし『Altana ou la Vie vénitienne』(1928) で、『物語』を記す。

カーネシニアは、並外れた心地よれで包み込んでくれるから、人は、ゆるい、穏やかな幸福感、友好的な

へつねぎ、控えめな喜び、優しい感謝の気持ち
のなかで、生きたふうになら。

強烈な生と死の対照を見て取った。ハートニーは中編小説
「The White Wand」の語つりで、いふこねせしる。

「エーネシアではとても起じない」とですが、このときや死の觀念がわたしに付きまといました。教会の鐘の音、美しさ、エーネシア人の圧倒的な元気で、これは、どれをとっても、感覺が人に「えぐられるもの」つまり、生を強調しているところです。しかし、やがて生を受け入れることができるとなれば、それは正反対の、死しか残つてこませど。北の国々では、わざわざな度合での生があるのです。でも、イタリアは「ハーフ・ア・リストの国」で、中間的色調の国ではあります。

「Jedem Tod in Venedig」(1912) は、死を題材とした短編小説。死の瞬間における心の状態を、死の原因によって分類して描く。死因別に死の瞬間の心の状態を記述する。死因別に死の瞬間の心の状態を記述する。

なお、ハーティーのややぼけた洋紙のなかに「リゾート」とあつたのは、ウェネツィアの潟湖をアドリア海から隔てている細長い砂州のことである。この島のアドリア海側の浜辺には、十九世紀後半から海水浴施設がつくれられ、二十世紀転換期には豪華なリゾートホテルも建てられて、のちにヴィスコンティ (Luchino Visconti, 1906-1976) によると、この島は「アドリア海のパリ」だといわれる。

1976) 離婚の映画『ベニスに死ゆ Morte a Venezia』(1971) 上場現れたるものが、上流階級の国際的保養地・社交場じだつていたやうである。

さて、ハートコーネーは、一九四〇年にもカーネツィアを訪れたが、一九五七年九月にカーネツィアを訪れたとわかるが、ホテルではなく、普通の邸の数部屋を借りて住まい始めた。聖セバстиヤーノ河岸にあらわの家(San Sebastiano 2542番地)は今も残っている。間口のあまつくなじ家だが、カーネツィアの家屋は一般で、低層の面壁は、通行者が深くのど、おもひいせられはじめてな家ではあるまい。家の正面は全体に古び、二階は田形アーチ窓が四つ連なり、中央にバルコニーがついている。外観はむろして豪華なものではないが、カーネツィアの家は、外觀から想像できない内装が豪華であるといふが少なくなくなかへ、この家がいつありたのではなか。

聖セバスピアーノ河岸は、聖マリコロトカ運河の南側の十手路フランダメハート・ガラートンを西端めど歩いて、北に曲がり、「風の小路」とこひねの路地を抜け、小運河沿いに田メートルばかり歩いたところである。この地区は、カーネツィアのなかでも、聖マルコ広場やコアマルト橋あたりとは異なり、ほとんじ地元の人たちしかいない、静かなところである。聖セバスピアーノ河岸の邸は、小運河を跨ぐ小橋を渡つたところに聖セバスピアーノ(セバスピアヌス)教会があるといふが、付かれたものであつた。ハートコーネーは、滞在したこの家のバルコニーから、教会の正面に据えられた、矢で射られて殉教する聖人セバスピアヌスの像を眺めることができた。ハートコーネーの滞在したこの家は、カトン・トル・カーナンとこひねの夫人の所有するものであった。夫人はロシア人で、オランダ人男爵の寡婦であった。カーネツィアは、十八世紀末に共和国が崩壊して以来、長期にわたる

異民族統治と経済不況とを経験するなかで、多数の館や家が裕福な外国人の所有物となつた。ヴェネツィアはその意味でも国際色豊かな町であつたのだが、この聖セバスティアーノ河岸の家も、同様の経過をたどつていたものだ。ハートリーはこの家の数室を借つたのである。

ハートリーは、この家が、毎年、春と秋にヴェネツィアのこの家の間にやってきて、春秋それぞれ二ヶ月ずつを過ぐ、した。一年の半分は、ここに滞在するよひになつたのである。ハートリーはヴェネツィア以外では、このまま自分の家を持たず、両親の家や、友人の家を転々として廻りついていたから、セバスティアーノ河岸のこの家の事が事実上の本拠であつたといえる。ハートリーは、この家の、書評の原稿と、長編・短編の小説などを書いた。代表作 *The Go-Between* もこの家で執筆されたものである。この家はまた、英國の友人・知人たちと交友する場にもなつた。トイカウチ・セントをはじめとする母國の友人・知人が訪れたり、滞在したりする場所になつたのである。

ハートリーが新たにヴェネツィアで知り合つて親父を継んだ人たちのなかに、バークレー伯爵夫人モリーがある。モリー・バークレー、小説 *A Perfect Woman* の献辞に名前を記される女性である。バークレー夫妻のヴェネツィアでの家は、バルビの館であった。これは、この町の田舎を通りである大運河に面した豪華な館で、今はヴェネト州政府のおかれている建物である。ハートリーが小説 *Eustace and Hilda* の主人公の滞在する館のモトルのひとつにしたのは、おやじのバルビの館である。

ハートリーは、ヴェネツィアでも活潑な社交をおこなつた。この間には、以前から、母國を捨てたり、半ば捨てたりして住み着いた富裕な英米人のつくる「ハイカラ」パーティーがあつた。この集団は、彼らだけで一種の貴族社会を形成していく。リゾート水浴をしてホテルに泊まるよひな同国人たちを軽蔑していた。バークレー夫妻もこの貴族社会

の一角をなしてゐたのである。

ハートニーがカーネギー邸へ暮らしこそをした1910年、イギリスにてトマス・ジョンソン夫妻であつた。米国出身の人たるもの。ジエラード・ヘンリイー夫人（マーク・吐温の富裕なゴダヤ女性）であった）は、のちにハートニーの中編小説*Mrs. Carteret Receives* の主人公のモデルとなつたのである。この夫婦は、北方の農園に面した、広い庭のある、豪華な館（ノバタリー・ダル・ザッフォの館）に住まつて、カーネギー邸に居住・滞在・訪問する人たちは、アーチー・ワーリーと駆け入れるかじりか、きびしへ吟味していた。たゞ彼は、愛人のダンサーを連れ、カーネギー邸を訪れた東洋学者アーカー・ウェイリー（Arthur Waley, 1889-1966）の如きは、受け入れを拒否されたのである。

ハートニーは、ハーバード大学に受け入れられながら、ハートニーがカーネギー邸に隠をしたのは、基本的には、Jの英米人グループの一人たちである。カーネギー入上流階級は、Jの英米人集団を本質的には受け入れていなかつたため、ハートニーの交際範囲もまた、基本的には英米人社会に限られたのである。Jの町にせよ、主に英米人のための教会として、英國国教会の聖公会教会があるが、ハートニーや、滞在中は、ジョンソン夫妻などといふやうに、さうく通つた。

カーネギー邸に滞在するときハートニーは専用の「ハンドリ」と船頭などを雇つてこた。ハートニーは、Jのハンドリ、即ち瀬に出かけるのを無上の喜びと、血のものだ、樂しみのために櫂を握る上じがかつた。ハートニーの短編中、本邦で初めて紹介された「ボヌロ島」や、カーネギー邸周辺の瀬で、ハンドリを乗り回した体験を描画化したものであつた。

一年の半ばをヴェネツィアで過ごす生活は、一九三九年、英伊が交戦を開始するまで続いた。ハートリー、四十四歳である。ハートリーが英國に家を構えたのは、「これ以後のことである。ヴェネツィアでじつ暮らし方をしてくる十数年のあいだに、本質的に時の止つてゐる町ヴェネツィアにも多少の変化は生じていた。聖セバスティアーノ河岸の家の前の小運河はモーターボート専用路となり、ゴンドラを横付けできなくなってしまった。ジョンストン夫人も亡くなり、英米人口ミコニティーは指導者を失つた。しかし、ヴェネツィアはハートリーにとって「わたしの思いが向かつてしまつ場所」わたしの根がいちばん深く降りている場所」であった。

ヴェネツィアがハートリーにとって居心地の良い場所であった理由のひとつは、現地で接するヴェネツィア人、とりわけ使用人たちを気に入つてことがあつたからである。ハートリーは手紙にてつ書いてゐる。

英國の村の生活で得られそうな個人的なさまざまな些事については、ヴェネツィアでじゅうぶんに得てゐると思ひます。彼らヴェネツィア人たちは、人に大きな関心を抱きますから、それを返すのも簡単、ずっと簡単です。階級の区別の強いことは英國よりも簡単だと思います。

第一次世界大戦も終わった一九四七年、五十一歳のハートリーは、八年ぶりにヴェネツィアを訪れた。大戦によつて英國社会が大きく変貌したのを嫌惡していたハートリーは、ヴェネツィアも変わつてしまつてゐるのではないかと怖れていたが、予想していたほどではなかつたらしい。現地から出した手紙のなかで、ハートリーは「万事が「楽

し」と書き、「友人は少々いや、たぶん大いに」といた方がよろしかつて、欠けてしまいましたが、大歓迎な様子の顔が至る所に見られます」と書いた。もつとも、聖セバスティアーノ河岸の家では、老男爵夫人が歓迎している様子を見せたものの、ハートリーには、外の見えない寝室と食堂の一間しか貸してくれなかつた。

男爵夫人に冷たくあしらわれたせいだらうか、一九四九年以後、五三年まで、ハートリーは、ヴェネツィアに滞在するときには、聖セバスティアーノ河岸を離れ、聖トロヴァーゾ地区にあるボンリーニの館のアパートメントを借りた。聖トロヴァーゾ地区といえば、これもザッテレ河岸に近いが、セバスティアーノ河岸よりもアカデミア美術館にずっと近寄つた場所である。ここにくることながら、この家主である女性とハートリーはつまくゆかなかつたらしへ。

一九五四年にヴェネツィアを訪れたときには、ハートリーはホテルに滞在してゐる。ハートリーも高齢（五十九歳）になり、外国に片足を置く生活は苦痛になつてきただらう。それどころには、ヴェネツィア愛好家のハートリーも、この町に食傷していた様子がみえる。一九五八年、講演旅行で訪れたハートリーを、ヴェネツィアの聴衆は、「熱烈に歓迎してくれたといえど」であつたのだが。

しかし、一九七一年、死も間近い床のなかでハートリーがなつかしく思ひ出していたのは、昔慣れ親しんだ「ヴェネツィアの」とであつた。死の一ヶ月前、親友ジョウノ・ホールに宛てた手紙には、こう書かれてゐる。

「ヴェネツィアを非難したくなるのも、じつは、こちらの精神状態のせいです。いつもひょいと幸せな状態ではないわけだ。エリザベス・ボウエンが、橋のひとつから身を乗り出して、たら、眼から涙があふれ出たわ、

なぜだかわからなかつたけれど、と書いたことがあります。そつなるのせ、あれほど元壁な光景を見ると、何も付け加えることができないし、何を取り去るのもできないからじゅうぶん。ヴォネツィアを離れたときは、わたしも昔は激しいノスタルジアを感じたのですが、その気持ちもしだいに失せ、最後に去ったときは、立ち去のをあつがたく思つたものです。暑熱が濡れた大きな毛布のように降りかかるつていきましたからね。でも、そのときにはわたしもすっかり年をじつっていました。ヴォネツィアから帰られるのせ、それまでに待つていたのです。

おわり

今回の拙稿では、わざわざは本邦であまつよく知られぬままの作家——J・P・ハートリーについて、履歴を概観したのと、都市ヴォネツィアとの関わり方を警観してみた。ハートリーの履歴との関わりで、ヴォネツィアを見る場合、重要なボイントはつづきのよつなものであつたと想ひます。

第一に、Jの作家が、壮年期の十数年間、ヴォネツィアを事实上の本拠として過りました関わつの深さにて、注目すべきである。

第二に、ハートリーがヴォネツィアに心地よさを感じ取るといつても、生と死の強烈なコントラストを捉えてこらむこと注目すべきである。

第三に、ハートリーにとって、ヴォネツィアが、英國社会への違和感と、父母姉への疎遠感といったものから逃れる避難所になつてこた点に注目すべきである。（この稿続く）

Evelyn Waugh, *Brideshead Revisited*, London: Chapman & Hall, 1945; 1960, p. 34.

Christopher Hudson, quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 261.

Walter Allen, *As I Walked Down New Grub Street: Memories of a Writing Life*, Chicago: University of Chicago Pr., 1981, p. 161.

Allen, *As I Walked Down New Grub Street*, p. 163.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 78

Wright, *Foreign Country*, pp. 78-9

Allen, *As I Walked Down New Grub Street*, p. 159.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 85.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, pp. 145-46.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, pp. 171-72.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 253.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 73.

Henri de Régnier, *La Vie vénitienne*, Paris: Mercure de France, 1963; 1986, p. 20.

L. P. Hartley, *The White Wand*, in *The Complete Short Stories of L. P. Hartley*, New York: Beaufort Books, 1986, p. 290.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 109.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 109.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 144.

Wright, *Foreign Country*, p. 198.

Quoted in Wright, *Foreign Country*, p. 267.